小澤滋樹さんを偲ぶ会　式辞・感話　二〇一四年二月九日

挨　拶

私は本日司会・進行役勤めます武藤陽一と申します。皆様「小澤滋樹さんを偲ぶ会」にようこそお越し下さいました。有難うございます。

小澤滋樹さんは去る一月二十三日にご逝去、ご意志により多磨葬祭場においてダビにふされ、密葬をすまされて、本日ここに「偲ぶ会」が持たれる運びとなりました。主催の「テコア聖書集会」と申しますのは、小澤さんとキリスト教の信仰を共にする仲間です。私どもには専門の教職が居りませんで、冠婚葬祭なども仲間内で互いに世話をします。何分素人のすることで不行届きのことも多いかと恐れますが、何とぞ不悪ご諒承の程お願い申しあげます。

なお本日借用したこの会場「今井館聖書講堂」は、かつて私どもの信仰の先達内村鑑三や矢内原忠雄が聖書を講じたところで、落成が一九一三年十月といいますから、移築修復を経てはおりますが、ちょうど百年になる古い建物です。

讃美歌　五一五（愛唱歌、結婚式でも）

聖　書　コリント人への第二の手紙四章16～18節

内村鑑三「続一日一生」七月二八日項

祈　祷

天にいます父なる神様、あなたは万物の創造者にいまし、世界人類の歴史を支配されるとともに私ども小さいものひとりひとりの生と死を宰り給う御方であることを畏れをもって信じ、感謝いたします。

父なる神様、あなたは小澤滋樹にいのちを与えて、その生涯を祝福し、ここに深いみ旨とあわれみによって彼をみ許にお召しになりました。小澤滋樹はその若き日によき師に出会い、神を畏れることを知り、キリストの福音を信じ、十字架の贖いと復活に与って罪のゆるしと新しい命に恵まれました。彼はこの絶大な恵みに対する心からの感謝をもって、誠実にキリスト信者の生を完うしました。晩年思わぬ重病に見舞われ苦しみましたが、最後までしっかり生きて、平安のうちに召されました。今や父なる神のふところにいだかれて、聖書の言う「死も悲しみも嘆きも労苦もない」天の休息入れられたことを信じ、感謝と喜びをもって彼の霊魂を御手に委ねます。

しかしながら、この地上に残された者はなお朽ちるものをまとって深い悲しみのうちにあります。慈愛と慰めの父なる神様、どうぞご遺族一同の上に、格別に淳子夫人の上に、そして彼に愛され彼を愛してここに集ったすべての者の上に、あなたのお慰めが豊かにありますように切に祈ります。

天の父なる神様、この時に当り、「地に落ちた一粒の麦」（ヨハネ一二・24）である小澤滋樹の生涯に習い、どうぞ私どももひとりひとりそれぞれの来るべき終わりの日を思って、厳粛に各自の「生涯の日を正しく数える」（詩編九〇・12）ことができますように、お導き下さい。

この集まりを通して、イエス・キリストの福音が宣べ伝えられ、出席者一同が神の祝福に与り、神のみ名が崇められるよい折として下さいますように、私どもの救い主イエス・キリストの御名によってお祈り申しあげます。

感　話　(1)

はなはだ僭越でありますが、司会者として感話の口火を切ることをお許し願います。

まず私の知る限りの小澤さんの略歴を申しあげます。小澤滋樹さんは一九三六年二月十二日のお生まれです。去る二月十二日で七八歳になられるところでした。東京生まれの東京育ちで、都立豊玉高校を経て中央大学法学部で学ばれ、ご卒業の一九六〇年に富士銀行に入行、同行不動産調査部も含めて三八年間お勤めになり、一九九八年に定年退職されました。その後のことについては別の形で後程申しあげます。

キリスト教との関係では、学生時代人生模索の中で、たまたま本屋で見つけた山本泰次郎『ローマ書講義』という本が、キリスト教との決定的出会いとなった由です。山本泰次郎は内村鑑三の晩年十年、彼に師事し、戦後独立伝道者となった人で、この本は一九五九年に著者自らガリ版刷りで刊行したものでした。小澤さんはこの本のローマ書七章「ああわれ悩める人なるかな、この死の体よりわれを救わん者は誰ぞ、われらの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す」というパウロの霊魂の叫びに対する山本先生の温かいものを感じさせる講解に深い共感と畏敬を覚え、直ちに著者を訪ねて、その日曜集会への入会を請い、許されて参席するようになったとのことです。こうして小澤さんは山本泰次郎を信仰の恩師として師事し、福音を学び信仰を養われていったのです。私事ながら私もまた山本泰次郎先生を恩師とする者で、小澤さんと私は同門の友人であります。

山本先生は一九七九年四月に永眠され、その一年後の八〇年四月から小澤さん夫妻は私どものテコア聖書集会に参加されるようになり、以来三十年余私どもは共に聖書を学び、共にキリストの福音信仰に生きる交わりを楽しんでまいりました。小澤さんは私どもの集会の長老格でした。時間的にあとさきになりましたが、小澤さんは一九六七年五月（保岡姓）淳子さんとご結婚になりました。結婚式は山本先生が司式されることにな

っていましたが、その時急病でおできになれなくなり、実は先生のお言い付けで私が代行しました。そのおかげで私どもはその時からお互いに旧知の間柄となっていた次第です。

小澤さん方の結婚式をした私が彼の野辺送りをしなければならないとは順序が逆で、「そのゆえは神知り給う」と信じつつも、私はなおも大いなるお方に「なにゆえに」と問いたい気持ちでいっぱいです。小澤さんこそ冬もコートを着たことがない程私どもの間で一番元気だと誰もが考えていたのに、そのはや過ぎた死はまことに残念で、悲しいです。

小澤さんの職業人生に話を戻します。小澤さんの世代はかろうじて戦争を知っていて、戦後は日本の再生復興の為に働きに働いたという、いわば企業戦士として生きる人が多かったように思われますが、小澤さんはそういう中で就職してすぐ六十年安保反対騒動に遭遇、新安保成立の日に首相官邸前で夜を明かしたということもあって、彼の言葉によれば、「わたしの関心は、職業人として完全になることよりも、銀行資本と国家権力との癒着、企業の公共性、仕事の生き甲斐という問題に関心が傾斜していくのが自然の成り行きであった」と言い、具体的には労働組合運動に深く関わったのでした。そして信仰の点では、集会で習ったことは「キリストの福音は生きた現実の中に働く、それゆえ、自浄能力に乏しく人権意識の希薄な職場の中で自己のアイデンティティを探し求める暮らしは、かなりしんどいものでした」と告白しています。（「テコア会四十周年記念文集」）

話を小澤さんの最後の病床のことに移します。私どもが小澤さんから病気のことを伺ったのは昨年の十月初旬、その一と月後にはもう病気がすい臓原発の肝臓に転移し、ガンがステージ四、余命二、三ヶ月から半年という宣告でした。しかし、体調は崩れることなく元気にしておられ、私どもの集会のクリスマス（一二月二二日）には次のようなことを語られたのが私の記憶に残っています。「イエスのゲッセマネの祈りが今の私の祈りです。（できることならこの杯を私から過ぎ去らせて下さい。しかし御心のままに）私はこの二つの願いの

間に人それぞれの人生があると思う。私としては、できるだけ平常心を保って、日々のルーティンを変わりなく続けていきたい。主にある平安こそが最善の抗がん剤だと思って」。そしてクリスマス・カードには「感慨深いクリスマス、平安のうちに新年を迎えようとしています」とありました。

しかし、病状は思わぬ早さで悪化し、年が明けて、新しい療法を始めようという日が入院となり、（八日）、再び家に帰ることはできませんでした。その間私は何回か病床を見舞い、語り合う中で、彼の心の中にある聖句、讃美歌、内村鑑三の言葉を聞き出すことが出来ました。それが（彼自身の論稿を別にして）この資料コピーです。そして死後については、告別式はせずに密葬とし、今井館を借用してテコア会の祈り会をしてほしい、ということでした。本日の集まりも、その彼の意向にそったものです。

わたしは年こそ小澤さんの上で、いつその日が来てもおかしくないのに、私どもの恩師に共に教えられた「死の準備」が出来ておらず、ターミナル・ケアーの知識も訓練もない人間で、小澤さんを見舞ってもしかるべき言葉もかけられない、せいぜい目と目を合わせて握手することぐらいしか出来ない不肖の先輩である事を痛感させられたのですが、彼は最後までしっかりしていて何度も来ていただいて、などとふだんの坦々としたもの言いは少しも変わらず、私はどれほど救われ、有難く、安心し、慰められ、励まされた次第でした。

小澤さんは慎み深く寡黙で、あまり自分のこと、自分の考え、自分の信仰を語るということをされませんでしたので、今回私は気が付いて、数年前私どもテコア聖書集会が「五十周年記念文集」を出した折、彼が寄せられた文章を改めて読んで、深い感銘を覚えました。（コピー２～３頁「憲法九条・福音」）ここに小澤さんがいる、これが小澤さんの信仰告白である、と。みなさんにぜひ読んでいただきたい思いでコピーしました。ほんの一端を指摘して、お読みいただくときのご参考に供します。

一

まずこの題ですが「憲法九条」は彼の九条の会参加、広く社会問題への関心と活動、「福音」はキリスト教の

信仰、前者を外とすれば、後者は内、日常生活と内面の生活、これは彼が社会人になった時、山本先生に導かれて与えられた信仰と、安保騒動でめざませられた社会問題への関心と見事に対応している、ということは、小澤さんはその時から終始一貫この二つの極の間に立ってその矛盾に苦悩し、その葛藤を誠実に担い、内外ともなる戦いを戦ってきた、信仰と生活を分けず一つのこととして生きられたのでした。

二

2頁の終わりから3頁にかけて述べられた彼の現状認識は七年前のものですが、それが現在のそれに全く同じであるのに驚くのですが、これは彼が4頁の彼が愛する聖句(神のエレミヤへの言葉)に習って「分かれ道に立って」時代のしるしをよく見ていたからであると思います。そしてここに「いにしえの道」とありますが、これは今日の言葉でいえば歴史認識のことです。聖書に学んだ小澤さんの正確堅実な歴史認識が彼の生むことない社会活動の原動力でありました。私どものおエラ方のそれがいかに貧しく内外のヒンシュクをかっていることを思う時、営々と働いた小澤さんに敬意を覚えざるを得ません。序ながら、歴史をよく勉強していた彼の趣味もまた歴史小説を読むことで、大仏次郎の「天皇の世紀」を読めなかったことを心残りとしていました。

三

この文章の最後に、4頁から小澤さんの「信仰告白」と言うべきことばをひろい読みして、あのエレミヤへの神の言葉「魂の安息」の秘密のよって来るものを証言したいと思います。

何とも謙虚で大胆な念願ではありませんか。私にとってここにいる小澤さんは正に尊敬するなつかしいキリスト者の同志であります。

最後に小澤さんが私にこれが今の自分の信仰ですと言って示された内村鑑三の短文を読んで私の話を終ります。

しかり、余はすべての善きものは墓のかなたにおいて在る。余の自由も、余の満足も、余の冠も、すべて来たらんとするキリストの王国において在る。余は今は待望の地位に立つ者である。『農夫、地の貴き産を得るを望みて、前と後ろとの雨を得るまで、久しく忍びてこれを待つごとく、忍びて主の来るを待つ』（ヤコブ書五・7）者である。

ゆえに、この世における余の生涯はどうでもよい。憎まるるもよい。誤解せられるもよい。貧しきもよい。裸なるもよい。余の永久の運命は、この世における余の境遇によって定められるものではない。余の運命を定める者は、余のため自己（おのれ）を捨てたまいし、余の主イエス・キリストである。彼は余のために所を備えんために、父のもとに行きたもうた。かれはまた来たりて、なんじをわれに受くべし」（ヨハネ伝一四・3）と約束したもうた。余のこの世にありては旅人である。暫時の滞留者である。余は一時、天幕をこの地に張るものである。永久の住み家を築く者ではない。神が余を呼びたもう時には、直ちに天幕の綱を絶ち、これを畳んで彼の国へと急ぐ者である。

（『続一日一生』七月二十八日の項）